

卑弥呼に下賜された五尺刀の意義

門田 誠一

〔抄録〕

本論では魏志倭人伝にみえる魏から卑弥呼に下賜された物品のうち、「五尺刀」について、漢代を中心とした鉄刀の銘文に尺の単位で表現される類例から、五尺刀の長さを推定する。また、刀銘には吉祥句などが記され、佩用する者を寿ほぐという目的があるとともに、史料・文献から臣に対する寵愛や死後の追悼の際に下賜され、匈奴に対する事例に示されるように蛮夷に対して与えられた。刀剣の長さである尺寸に関しては、漢代から南北朝にかけて、尺を単位とし、文化・教養に依拠したいわば人文的類型の表現であり、尺刀が官吏の用いる文房具的な利器であるのに対し、

七尺刀が軍事的権威や個人の勇武を可視的に表徴し、五尺刀は佩刀としては一般的なものではあるが、南北朝期の歌謡にも所有が切望されることがみえ、南朝・梁では有銘の五尺刀そのものの発現が吉祥とされた。このように五尺刀を含む刀剣は、吉祥句を銘すことによって佩用者を寿ほぎ、あるいは有銘の五尺刀そのものが祥瑞であり、また、これを黄金ともに下賜品することは漢代以来の系譜を引くことを示した。

キーワード 五尺刀、卑弥呼、魏志倭人伝、銘文、刀剣

序言

『三国志』魏書東夷伝倭人条（以下では魏志倭人伝と略称）には倭の諸国の位置や倭の風土・環境、倭人の風俗・習慣などともに倭が魏に遣使した記事があり、当時の外交や国際的状況を示す同時代史料と

して貴重である。このような内容を含む魏志倭人伝の研究の多くは邪馬台国をはじめとした諸国の位置比定に費やされたが、その一方で主として東洋史研究者によって魏に対する倭の政治的位置づけや当時の国際状況における魏と倭の交渉の意味が考究されてきた。このような視点と研究方法は魏志倭人伝の内容を同時代的かつ相対的に検討する

という点において重要である。さらに物質文化の史的検討という観点からは魏が倭に下賜した物品の同時代的意味を考察することによって、魏と倭の関係を物質的な根拠から論じることが可能となる。しかしながら、このような視点からは主として魏が卑弥呼に下賜した「銅鏡百枚」について、三角縁神獸鏡の製作地論争に関わって言及されている。その他では下賜品にみえる織物類について、専門の見地から分析が行われているが、これらを除くと、魏の下賜品個々の詳細な検討はほとんどなされていない。

魏志倭人伝の記述のなかでも、もともと史料性が高いとされるのが魏の皇帝から卑弥呼にもたらされた制書の部分とされる。その根拠は漢代以降においては節略されることのある「制詔」の語があることであって、『三国志』を編纂した陳寿がこの部分を記すにあたって、確實な史料をもとにしたと推定されている^①。このような見方によってたつならば、制書の部分は魏志倭人伝のなかでも解釈の入る余地がなく、そのために実物資料である出土遺物や遺構などとの比較検討のもっとも有効な対象となる。加えて、魏志倭人伝の編纂時期と同時代である魏晋代と制度や文化において相当部分の継続性が想定される後漢代の考古資料は豊富であり、かつ文献・史料も備わっている。よって、魏志倭人伝の魏による卑弥呼への制書に記された下賜品の種類や数量については正確であり、さらにそれらに関する同時代的の史・資料による位置づけが可能となる。そしてこのような検討によって、下賜品の同時代的意義の復原による魏の卑弥呼に対する国際的、外交的位置づけも検証できるのであって、本論では以上の方法と目的によって下

賜品のなかでも「五尺刀二口」着目する。その理由は時期的にみても鉄製の刀であることが確実なうえ、中国古代において鉄刀は武器として一般的であり、かつ漢魏南北朝期の出土遺物として一定の出土数が蓄積しており、普遍的な武器として出土資料や文献の記述も多いためである。本論ではこのような鉄刀としての「五尺刀二口」に関して、五尺とされた刀剣の長さの観点から、同時代的な認識と価値観による検討をもとに下賜品としての相対的な位置づけを行うことによって、当時の国際関係において、倭に対する魏の政治的姿勢や外交的認識の検討に資することを目的とする。

一 五尺刀に対する言及

魏志倭人伝には景初二年十二月に魏の皇帝による卑弥呼に対する詔書の内容として、親魏倭王となし、あわせて遠路の遣使に対する下賜品として、「絳地交龍錦五匹・絳地芻粟野十張・菁絳五十匹・紺青五十四・答汝所献貢。直又特賜汝紺地句文錦三匹・細班華野五張・白絹五十四・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠鉛丹各五十斤」があげられている。そして、これらの賜物を装封して難升米、牛利に持たせ汝に与えるので、倭国に帰還したならば記録と照合して受取り、全ての品を汝の国中の人々に公示し、魏が汝を哀れんでいることを人々に周知せよ、ここに汝に好き物を鄭重に選んで汝に下賜するものである、と記されている。この下賜品は布地などの織物が主体となっており、そのほかで考古学的に検討されてきたのが銅鏡百枚であるが、金属素

材としては金八両があり、金属製品としては、この銅鏡と金八両そして五尺刀二口のみであることが注目される。

五尺刀の形状やその由来については藤田元春氏が詳しく言及している。それによると刀剣としての五尺刀については『周礼』冬官に「鄭之刀、吳越之劍」とあるように古くからある鉄器であり、『日本書紀』推古天皇の歌に「大刀ならば吳の摩差比」と詠まれているように、日本古代には吳すなわち江南から刀剣を輸入していたことを根拠として、五尺刀は大刀ではなく、吳の劍であるとする。また、魏の道里が現在の日本の里の四十倍に達していたことから考えて、周尺の五尺はおそらく二尺五寸か三尺前後の刀であったと推定し、形状としては直刀であったとする^⑤。

いっぽう五尺刀の形状についてはこれまでは主に銅鏡との関係から言及されており、五尺刀が取り上げられる場合も同時代の出土遺物との比定が中心となってきた。そのなかで主な見解として三品彰英氏は遺物の出土事例として佐賀県・三津永田遺跡の甕棺から出土した長さ約五〇センチメートルの素環頭大刀と類品をあげて五尺刀がこれらを指すとした^⑥。

考古学からの見解として石野博信氏は魏の一尺を二四・一二センチメートルとして、五尺刀を一〇・六センチメートルとするが、弥生時代の出土例として一〇センチメートルをこえる長刀はないとし、また、魏志倭人伝（石野氏は「倭人条」とする）で五尺刀が銅鏡の前に記されており、数も少ないのは五尺刀が威信財として銅鏡よりも上位と認識されていたとみる。また、五尺刀が軍事力を象徴しており、

その下賜が倭国の軍事的緊張と関連していたことを示唆した^⑤。このように考古学的な考察として弥生時代後期に出土例の多い素環頭大刀を五尺刀の類型としてとらえる傾向がみられる^⑥。

史料・文献上の事例としては佐伯有清氏が『漢書』匈奴伝や『後漢書』南匈奴伝には織物類の賜与が主体であり、刀などに関しては「佩刀」などがみられるが、その例はわずかであるとし、このような傾向からみると卑弥呼に贈れた五尺刀はやや異例のことであったとする。また、出土遺物との関連では平原遺跡で出土した素環頭大刀や三津永田遺跡出土の新代の獣帯鏡・素環頭大刀などは「五尺の刀二口」「銅鏡百枚」を連想させるとした^⑦。

このような魏志倭人伝の五尺刀に対するこれまでの言及に対して、現状では中国で新たに知られた考古資料から五尺刀について考察することが可能となっており、次項でふれることとする。

二 五尺刀に関連する刀剣銘文

魏志倭人伝と前後する時期の五尺刀の長さを実際に推し量ることのできる遺物としては、刀剣の銘文に長さが記された遺物がある。その典型としては後漢・永寿二年（一五六）金錯銘刀があげられる。この鉄刀は二〇一一年に中国国家博物館に新たに所蔵された資料で全長七九・八センチメートル、刀身幅は三センチメートル、峰部幅〇・七センチメートルの素環頭大刀で環頭部の直径は六センチメートルである。峰部には五四字が金象嵌で記されており、現状の釈読は以下のとおり

である（図1-1）。

永寿二年二月濯龍造廿^⑧（濯）百辟長三尺四寸把刀堂工劉滿鉞工

虞弘歷待詔王甫金錯待詔濯宜領濯龍別監唐衡監作□妙北主

この文章には不明な語句や内容もあるが、「詔」の語や階層的な工匠の名がみられることから皇帝専用の大刀と推定されており、かつ「物勒工名」すなわち製作した工人の名を具体的に記した資料と考えられている。^⑧ 本論と関連するのは銘文中の長さの表記であつて、この刀は「長三尺四寸把刀」とされており、漢代の一尺は二三・一センチメートルとされるから、三尺四寸は七八・五四センチメートルとなり、この数値はこの大刀の実寸が七九・八センチメートルであるのと近似することから、製作当時の実寸表記と考えられている。なお、「把刀」とは『後漢書』応奉伝の李賢の注に「賜奉錢十萬、駁犀方具劍、金錯把刀劍、革帶各一」とあり、また『太平御覽』卷三四五・刀上に引く『東漢觀記』に「又曰応奉得賜金錯把刀」とあり、また、『芸文類聚』に引く晋・張協の『文身刀銘』に続いて同じく彼の撰になる『把刀銘』に曰くとして「奔奔名金、昆吾遺璞、裁為把刀、利亜切玉」としてみえるが、実物としては、これまでその例が知られておらず、この永寿二年銘金錯刀がその実物を示すものとみられている。^⑩

また、逆にこの刀の長さである七・九八センチメートルが「三尺四寸」であると考えて、漢代の一尺を二三・四七センチメートルとして割り出すと、三尺は七〇・四一センチメートル、四尺は九三・八八センチメートルであり、五尺刀は一一七・三五センチメートルとなるとし、これら以外に三尺半の刀として、この刀を実例としてあげたうえ

で、実際の大刀の長さは必ずしも精微な尺寸に適合するものでないとする見方がある。^⑪

いずれの見解をとるにしろ、後にふれる五尺刀は必ずしも完整な長さを規準とした物理的類型ではなく、南北朝期の漢詩にみえる比喩的意味を含めて、おおまかな大刀の範疇を示すと理解することが適切であろう。すなわち、刀筆の吏として典型化される短い書刀をはじめとして、精緻な実寸というよりは五尺・七尺などのいわば抽象概念による人文的類型化がなされていたと考えられるのである。

このような刀の別の属性としては吉祥句を記すことによつて、佩用者を寿ぐことがあげられる。それを示す出土資料として、つとに知られるものが四川・成都天廻山漢墓出土金錯鉄刀である（図1-2）。その金象嵌銘には「光和七年広漢工官□□服者尊長保子孫侯侯王□宜□」とあり、後漢の光和七年（一八四）に後漢の官營工房である工官で作られ、この刀を服する者は地位が尊（たか）く、長く子孫に恵まれ、侯王になる、などの定型的な吉祥句が記されており、長さ一八・五センチメートル、幅一・五センチメートルで、刀身の片側には報告者が鳳凰とする複数の鳥状の文様が象嵌されている。^⑬

この刀を漢代に知られた金馬刀にあたるとする見解がある。^⑭ 金馬刀とは金馬書刀とも呼ばれ、『漢書』循吏伝の文翁の条に郡の少府の用度を節約するため、刀布など蜀の物を買集め、計吏に持たせて博士に送った、とあるのに対し、晋灼の注として「旧時蜀郡工官作金馬書刀者、似佩刀形、金錯其拊」とあり、蜀郡の工官が作った金馬書刀は形が佩刀に似ており、金象嵌があつた、という特徴を付言している。

また、漢・李尤の「金馬書刀銘」に「巧冶煉剛、金馬托形。黃文錯鏤、兼勒工名」すなわち巧冶煉剛にして、金馬の形を托し、黃文錯鏤によつて、兼ねて工人の名を記したという内容があり、これらによつて成都天回山漢墓出土品が金馬書刀に該当するとみる。これと関係する銘文として、これまで金文の著録にみられるものとしては以下の三例がある。¹⁷⁾

永元十□□年広□郡工官卅涑書刀工馮武（下部欠字）

永元十六年、広漢郡工官卅涑（中間九字欠）史成長荆守丞熹主

（上部欠字）広漢□□□□世□□□秋造護工卒史克長不丞奉主

これらは実物の所在は不明であるが、付された図から成都天回山漢墓出土遺物と同様の形状であつたとみられ、書刀に金象嵌銘が施され、なかには「卅涑」などの定型的な語句が記される場合もあつたことが知られる。

金象嵌銘の鉄剣としては一九七八年に江蘇・徐州銅山県駝龍山漢墓で出土した資料には劍把正面に金象嵌で「建初二年蜀郡西工官王愔造五十涑□□□孫劍□」の銘文が記されていた（図1-3）。また、山東・臨沂蒼山出土後漢代鉄刀銘文には「永初六年五月丙午造卅涑大刀吉祥」とあり、後漢の永初六年（一一二）に製作され、「五月丙午」「吉祥」の語の記された作例である（図1-4）。¹⁸⁾

いっぽう、周知のように東大寺山古墳（奈良県天理市）から出土した鉄刀には「中平□□五月丙午造作文刀百練清劔上庇星宿下辟不祥」の金象嵌銘文があり、この中平は後漢・靈帝の年号（一八四～一八九）であることが知られている。この銘文にある「百練」も、これに

続く「清劔」という刀の有様を説明しており、これらの語句によつて、この刀が鍛えられた鉄で作られた刀であることを示している。また、「上は星宿に庇じ」とあり、これに続く未収の対句ともに吉祥句を形成していると考えられる。

刀剣にみえる「五月丙午」については金属製品を製作するうえでの定型的な吉祥句とする先学の研究がある。それによると、もつとも太陽光の強いとされる五月丙午に造られた刀であり、刀剣の製作に吉祥があると解されている。²²⁾銅鏡や刀剣の銘文に現れる五月丙午に関しては、その典拠として『論衡』乱龍篇に「陽燧は火を天に取るに五月丙午の日の中の時、五石を消煉し、鑄て以つて器となせば、すなわち能く火を得る」とあることが参照される。すなわち、ここでは五月丙午が太陽光を集めて火を作る陽燧を鑄造する唯一の時期として記されている。

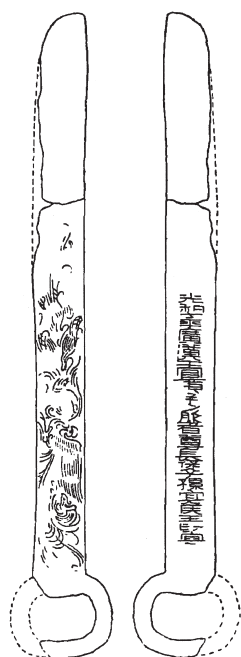
五月および丙午は『淮南子』天文訓に「五月火正」とあり、²³⁾春秋左氏伝『昭公一七年に「火の出ずるは夏においては三月となし、商においては四月となし、周においては五月となす。夏の数は天を得たり。若し火作（おこ）らば、其れ四国に當らん」とあり、五月と火の関係が説かれており、これらは五行思想に基づくものと考えられている。²⁴⁾また、刀剣に関しては『抱朴子』登涉篇に引く『金簡記』にいうとして「五月丙午の日の日中を以て、五石を鑄て、その銅を下せ、と。五石とは雄黄・丹砂・慈石・礬石・曾青である」とし、これらを神炉に入れて鍛錬して精製した銅を用いて作った雄・雌の劍は水の精を折伏し、両者を帯びて水上を行けば、蛟竜・大魚・水神も近づこうとしない、とある。²⁵⁾

永初六年五月丙午造世康大刀吉羊



3 徐州・後漢建初二年銘鉄剣

4 山東・蒼山後漢永初六年銘鉄刀



2 成都・天廻山漢墓
光和七年金錯銘鉄刀



永壽二年二月濯龍造廿五年百辟
長三尺四寸把刀齒工劉滿銘
工莫廣前廣詩記王申全錯
衍詔灌宜頤濯龍別監唐
彌臨佐駙姚并主

1 後漢永壽二年銘金錯鉄刀



5 徐州出土画像石「蘭錡図」

図1 尺寸・吉祥句の記された有銘刀剣と関連資料

また、『後漢書』郎顗伝には五月丙午に関する次のような内容がある。郎顗は昼には経義を研鑽し、夜は天象の度数を占い、専心して倦むことのなかったが、順帝の時にしばしば災異が現れたことに対し、七つの項目を上奏した。そのうち第五の項目のなかに五月丙午の日に大尉を派遣して楯と斧を持たせ、井を描いた旗を立て、玉板の策を書いて、白氣の災異を引かせ、西郊で自責して罪を求め、咎を天に謝罪して妖氣を消滅させれば、火をもつて金に勝ち、禍を福に転じることができると説いている。²⁷ここでは五月丙午は種々の祭儀を行うことによって火が金に勝つとされ、この日そのものが一種の祥瑞であり、吉祥を示すことがわかる。

周知のように漢代の銅鏡銘文には定型的な吉祥句が記されるが、吉祥句とともに五月丙午が用いられ、それは鏡の鑄師が五月丙午を陰陽調和の吉辰として重んじたことによるとされる。²⁸管見の限りで銅鏡銘文のなかで太陽すなわち天に対する寿詞の典型的な例をあげると「延熹二年五月丙午日天大述、広漢西蜀造作明竟、幽凍三商、天王日月、位至三公、長樂未央、吉且羊」²⁹があり、後漢の延熹二年（一五九）の「五月丙午日」に「天が大いに述べる」とあり、その言辞には「位至三公」「長樂未央」「吉且羊（筆者注・祥）」などのような典型的な吉祥句が連ねられており、これらの語を用いて五月丙午の日に天が「広漢西蜀」すなわち現在では四川省に入る地域で造られたこの鏡を寿いだことがわかる。このような文献記載と銅鏡銘文などを参照して、五月丙午の日中が最も陽の力が強いという象徴的な語として、金属製品の製作に適した時日として吉祥句的に用いられると考えられている。³⁰

「五月丙午」に典型化される漢代を中心とした刀剣や鏡の銘文には吉祥句が定型的に用いられており、銘のある刀剣は単に武器であるだけでなく、佩用する者を寿ぐ目的がある。これを確認し、後段で行う卑弥呼に下賜された五尺刀に対する考察の前提としておきたい。

三 文献・史料にみえる賜刀

漢代から三国時代を中心とした時期の五尺刀について考察する前提として刀の下賜や佩用の具体的な様相について瞥見する。

まず、身に着けて佩用する刀については、文字通り佩刀という語がある。たとえば、『芸文類聚』に引く『東觀漢記』には後漢の建初（七六―八四）年中のこととして、陳留太守となった馬嚴が功曹史李襲を宮中に遣わすと皇帝（章帝）が病を問うて、黄金十斤・葛縛佩刀・書刀革帶付を賜ったとある。³¹この記述からは革帶付の書刀とともに葛縛佩刀が賜与されたことがわかり、個人の佩用する利器として両者が認識されていたことがわかる。いうまでもなく書刀とは簡牘を削るための利器であり、これとともに葛飾りのある佩刀が個人に備えられるべき刀と考えられていたのである。

また、刀に関しては剣を含めて、下賜の事例が史料・文献に現れており、論旨に関連する限りにおいて、時期を限定していくつかを参照する。

端的な例としては、前漢の昭帝が元鳳五年（紀元前七六）に広陵歴王胥に錢二十万・黄金二百斤と輿車である安車やその馬とともに劍二

振を下賜している。⁽³²⁾

『後漢書』には南陽郡湖陽県（現在の河南省唐川県）の豪族であった馮魴の孫にあたる馮石のこととして、彼は世に取り入るのがうまく、安帝の寵臣となり、帝が馮石の衛尉府に行幸し、留まって酒を飲むこと十日あまり、駁犀具剣・佩刀・紫艾綬・玉珎をそれぞれ一つずつ下賜し、馮石の子の馮世を任じて黃門侍郎とし、馮世の第二人は郎中となつた、とある。⁽³³⁾

後漢の章帝は東平憲王劉蒼を重く任じ、その陵に行幸して、太牢（牛・羊・豕の犠牲）を用い、章帝自ら祠坐（祭祀をする場所）に拝し、哭泣して哀切の情を尽くし、御剣を陵前に下賜している。⁽³⁴⁾ここでは帝が自らの剣を陵前に下賜することによって、篤く弔うことを示している。

これらの他には塞外民族への刀剣の下賜としては、匈奴の单于に対して剣を下賜する例が複数にわたってみられる。たとえば前漢の甘露三年（紀元前五二）には呼韓邪单于が正月の朝賀に際して来朝し、藩臣を称して朝謁した際に宣帝は冠帯・衣裳・黄金璽・藍綬などともに玉具剣・佩刀を下賜した。⁽³⁵⁾この時の下賜品にはほかに黄金二十斤があることも、卑弥呼に対する下賜品と共通するのであり、この点については後述する。

後漢代では建武二六年（五〇）の秋に南匈奴の单于が上奏文を奉じて詣闕に詣でた際の下賜品のなかに冠帯・衣裳・黄金璽・藍綬などとともに宝剣がみられる。⁽³⁶⁾さきの呼韓邪单于の場合とともに印綬が下賜されている点も魏の卑弥呼への下賜品と共通する。

また、建武二八年（五二）に北匈奴が遣使して和親を求めた際の司徒班彪の上奏にみえる下賜品として馬を献じた左骨都侯と右谷蠡王に対し、雜繒各々四百匹と斬馬劍各々一がみえる。⁽³⁷⁾漢安二年（一四三）には呼蘭若尸逐就单于の兜樓儲に対して、皇帝が出御して、大鴻臚をして節と璽綬を拝受し、殿に上らせた際の下賜品に青蓋の馬車などとともに玉具刀剣がみえる。⁽³⁸⁾

このように寵臣や塞外民族に下賜されることもあつた刀剣のうち、刀の種類に関しては、後代の文献になるが『唐六典』には刀の制には四種があるとし、それらは儀刀・鄣刀・横刀・陌刀であると述べ、その注として横刀は佩刀であり、兵士が佩用するものとで、その名は隋より起こるとしている。⁽³⁹⁾ここでは佩刀は戦闘を担う兵士が用いるものとされ、実戦に際する殺傷力を伴う刀として記されている。

ただし、佩刀の語は隋以前の史料に現れており、漢代にはすでにこの語が用いられていた。その例は多いが、たとえば前漢の蓋寛饒は宣帝への進言が誹謗であり、大逆であるとされ、帝が獄に下すと蓋寛饒は自ら佩刀を引き寄せ、北門のもとで自刎したが、これを憐れまぬものはなかったという。⁽⁴⁰⁾また、匈奴への使者となつた蘇武は单于に尋問された際に、操を曲げ、君命を辱めてはたとえ生き延びるとも何の面目あつて漢に帰れようか、と自らの佩刀で胸を刺すが、一命はとりとめた。⁽⁴¹⁾

佩刀とされる種類の長さを知る記述として、『後漢書』董卓伝には越騎校尉で汝南の伍孚が凶毒に忿（いか）り、志してこれを手ずから刃にかけようとし、朝服の懷に佩刀して以て董卓に見えた、とみえる。⁽⁴²⁾

結局、伍孚の佩刀は董卓を害することはできず、逆に殺されることになるが、『後漢書』編纂時点では生地の豊富に使用された緩やかな衣装の象徴である朝服に隠せる程度の長さで認識されたことがわかる。

『三国志』にも佩刀の語がみえる。たとえば、揚州の鄭宝が住民を追い立てて長江南岸へ渡ろうと計画し、劉曄が高貴な血筋であるため首謀者にしようとしていたが、これを察知した劉曄は酒盛りの中で血気盛んな若者に鄭宝を斬らせる手筈であった。しかし、彼らが手くだせずにはいたところ、自ら佩刀を引き寄せ、鄭宝を切り倒し、その首を持つて軍に命令した、という描写がある。⁴³

これらによって懐に隠せるような短い利器とは異なり、座した際には体側に置くほどの長さであり、それは身に佩用する刀であって、文字通りの佩刀として認識されていたことが知られる。

佩刀の付属品の記述として『後漢書』輿服志には、漢は秦の制を承け、用いて改めず、ゆえにこれに加うるに双印・佩刀を装飾とし、孝明帝の時にいたり、大佩として、衝牙双瑠璫をつけ、それは皆白玉をもつてしたとあり、孝明帝が白玉牙双瑠璫を付けたことを大佩と表現している。⁴⁴ このことに顕著なように、身分を表示するための印と合わせて佩用される刀は漢代の階層制度とも関わっていた。

四 尺寸による刀剣の類型と佩用者の階層

刀の長さに関しては史書に大刀の語が散見され、時期の遡る用例が『漢書』にみえている。丞相楊敞の子であり、狷介で知られる楊惲が

太僕の戴長楽と仲違いした際に、自らの有利さを説こうとし、それが拒否されると、怒って大刀を持つて相手を威嚇し、脅す場面に用いられている。⁴⁵ ここにみえる大刀は佩刀のなかでも長い部類に入るものを指したと思われる。

大刀の語は南朝の徐陵の撰になる『玉台新詠』の「古絶句四首」に「何當大刀頭、破鏡飛上天」とみえ、⁴⁶ この詩は六朝以前のものとみられており、その時期の大刀の語の用例となり、これは詩作の時代からみて環頭大刀とみられている。⁴⁷

このような抽象的に長さを示す大刀のほかに具体的な長さを示す語として尺刀があり、その例としては『漢書』李陵伝に李陵が居延地域の北方で匈奴と戦った際、谷の中にいた李陵の軍が山上の敵から雨のように矢を浴び、漢軍は南行したが未だ鞬汗山（居延の北西）に至らず、矢五十万本をこの日一日で射つくしたため、ただちに兵車を捨て去った。それでも士卒はまだ三千余人おり、車輪の輻を切り取って手に持ち、軍吏は尺刀をもつて鞬汗山の峡谷に入った、とある。⁴⁸ ここでは矢が尽きた非常の状況において、本来は戦闘用の武器ではなく軍に従った役人が持っていた尺刀を武器の変わりに手にしており、本来は官吏の備えるべき利器であったことを示している。

尺刀の用途が知られる記述としては『魏書』王慧龍伝に劉義隆が呂玄伯を雇って自分を殺そうとしていることを察知した王慧龍は人をして刺客である呂玄伯の懐を探らせると尺刀があつたので、玄伯は叩頭して請死を請うた、とある。⁴⁹

管見では文献・史料上では長さを含めた刀の名称・種類としては以

上にみたように尺刀と五尺刀および以下に述べるように、三尺・七尺があるが、江田船山古墳鉄刀銘にみえる四尺刀は寡聞にして知らない。五尺刀を上回る七尺の刀剣について、『後漢書』馮異伝には建武二年春に赤眉・延岑らが三輔を荒らし回り、郡県の大姓どもがそれぞれに軍勢を抱えていたが、大司徒鄧禹では平定させられず、馮異がその後任として討伐に派遣され、それに際して光武帝の御軍が河南まで見送りに出て、乗輿と七尺の具剣を賜った、とある。⁽⁵⁰⁾ここでは赤眉の乱を平定させるために軍事力の象徴として長大でかつ宝玉で装飾したと推定される剣が下賜されている。⁽⁵¹⁾

また、『晋書』劉曜伝には太寧元（三二三）年に西晋の陳安が征西將軍・劉貢と戦い、隴城に包囲されたときに、陳安は左手に七尺大刀を奮（振）い、右手に丈八蛇矛を執って、接近戦では、刀と矛を同時にくり出し、ひと振りです、六人を殺害した、という。⁽⁵²⁾陳安が死んだ時の歌にも、七尺の大刀を振るったことが詠われている。⁽⁵³⁾

さきにふれたように漢代の一尺を約二三センチメートルとして割り出すと、七尺は一六〇センチメートルを越え、⁽⁵⁴⁾常識的には実用というよりは軍事的權威の可視的な表徴とみられ、『後漢書』馮異伝ではこのような意味で七尺大刀が用いられていると思われる。いっぽう、『晋書』劉曜伝では実際の武器として現れるが、左手だけで振るったなどの記述からは、むしろ七尺大刀の語は、これを使った陳安の勇猛と武弁を強調するために修飾的に用いられたと思われる。

このような漢代から魏晋頃の大刀を含めた武器の重さについては『三国志』典傳伝に典章は大きな双戟と長刀を好んで持ち、そのため

戦の時に帳下の壮士に典君あり、一双戟八十斤を提げると言われた、とある。⁽⁵⁵⁾ここにみえる双戟の重さについて、当時の一斤が現在の二二・七二グラムとみて、八十斤を三六キログラム程度とし、長刀もその程度であったとする見方がある。⁽⁵⁶⁾ただし、これも事実か否かの詮索よりも、濮陽で呂布と曹操が戦ったとき、奮戦して呂布軍を防いだ典章の勇猛を象徴するための語と解するべきであろう。

以上のように史料・文献から長さのわかる大刀とそれらの象徴的意味をみてきたが、整理してみると、尺刀は身につける利器であり、戦闘における使用や人を殺傷するためには五尺程度の長さが必要であったとみられ、それらが佩刀と呼ばれたと考えられ、このような佩刀や大刀に入るものとして五尺刀があったと考えられる。

以上のような尺寸を類型とした刀の佩用者の階層を示すのが、広く著聞する前漢の高祖・劉邦の立身に関する説話である。すなわち、劉邦の死の間際の言として「吾布衣をもつて提三尺剣を提げて天下を取る」とか「三尺剣を提げて天下を捕る者は朕なり」⁽⁵⁷⁾などがあり、世に出る前の劉邦が低い階層にあったことをことさらに強調し、その後の立身と漢朝の功業を際立たせる示す逸話として知られる。⁽⁵⁸⁾刀剣と佩用者の身分や階層という本論での考察では、この逸話がすべて史実であるかという詮索よりも記述の編纂時点で三尺剣が下層民を象徴する語であるという前提のもとに成立した逸話である点が重要である。

この逸話はその後、晋代の崔豹の撰になる『古今注』においては変化して以下のような内容になる。すなわち、高祖劉邦の白蛇剣は長さが七尺であり、泗水亭長であったとき、始皇帝の陵墓を築く為に驪山

に民夫を連れて行った折には、所持する剣は当時の常識によって三尺であったが、後に富貴になり、七尺の宝剑を得て、もとの剣を捨てて、これを所持した。後に漢の世になって、高祖の佩用した剣は白蛇を斬ったことで著聞したが、高祖は常にこの剣を佩用し、すなわちこれが白蛇を斬った剣といわれたとある⁶³⁾。ここでは高祖劉邦の功業の前の逸話として、白蛇を斬り、これを祥瑞として漢を興したことを剣の長さから説明している。すなわち、卑賤の境遇では三尺の剣を用い、その身を興した後は七尺の剣を用いたことから、剣の長さは佩用者の身分や階層の違いを体现するという認識があったことが知られる。この事実をもとに高祖劉邦の逸話が喧伝され、唐の太宗・李世民は「朕提三尺劍定四海」(『旧唐書』西域伝貞觀四年条)と自ら言い、明の太祖洪武帝・朱元璋も「朕起布衣提三尺劍」(寥道南『殿閣詞林記』卷五・部学・学士承旨兼吏部尚書斷詹同)と述べており、後代の王朝の創業者によって功業の定型句として重用された⁶⁴⁾。

七尺以上の剣に関する記述として『漢書』広川恵王劉越伝には広川国の恵王越の孫の去が広川王とされた際に、去は『易経』『論語』『孝経』の伝授を受け、そのいずれにも精通し、文辞・方伎・博奕・倡優を好み、その殿門には剣士である成慶の画像があり、それは短衣・大袴・長劍の姿で、去はそれを好んで七尺五寸の剣を作り、衣服などはその画像にならった、という⁶⁵⁾。この記述から紀元前一世紀頃には長劍を佩用した勇士をもてはやす風潮があったことを示し、画像石・画像埴などに長劍を振るう人物が表現されている文化的背景としてつとに言及されている⁶⁶⁾。

以上の文献の内容からは漢代には三尺劍と七尺劍は佩用者の階層の高低の表徴であったことが知られる。これらのうち七尺として象徴化される長い刀劍に関連する画像をあげると、まず、徐州出土画像石の「蘭錡図」と呼ばれる資料がある(報告文では八号石。縦一四〇×横一二五×厚さ二三センチメートル・図1-5)。これは武器庫に置かれた兵器を懸けるための什器であり、その前には左手に弓、右手には報告者が鈎鑲とする一種の武器を持った人物が立っており、その頭上には鎧甲・劍・矛などとともに環頭大刀が架け渡されている。報告者はこのような什器は『西京賦』に「武庫禁兵、設在蘭錡」とある武器庫内に設置された什器に該当すると推定した。この画像石の年代は後漢中頃から末頃とされている⁶⁴⁾。ここに表現された環頭大刀は環頭部に綬状のものが結びつけられており、長さは人物の背丈ほどもあり、絵画的修飾はあるとしても、当時の大刀に関する同時代的意識が看取されよう。

五尺刀そのものがみえる史料としては『南齊書』祥瑞志の次のような記述があげられる。永明十年(四八四)に蘭陵(山東省棗庄の南東、現在は臨沂市に轄入)の民である齊伯生が六台山において金璽一鈕を獲たが、その印面の文章には「年予主」とあった、という記述があり、それに続いて、世祖・武帝(蕭贍)が盆城(江蘇省盆城県)に治した際に、五尺刀一十口を得たが、それは永明の年暦の数であった、という⁶⁵⁾。南齊代の祥瑞は一一三の事例があり、そのうち、高帝代の建元四年間に二〇例あり、武帝代の永明一一年間には八七例があつて、これらの二帝の代に集中している。そもそも祥瑞は仁徳のある聖王の代に

現れるとされており、このことによってその帝の政治の妥当性を世に示すものであつて、このような祥瑞が集中する高帝と武帝の代の政治的妥当性を顕現するためとみられる。⁽⁶⁶⁾そして、このような目的をもつた武帝代の祥瑞の一つとして永明の年数を銘した五尺刀の発見がとりあげられており、このことは五尺刀そのものとともに刀銘が祥瑞の範疇に入るものであることを示している。

この他に五尺刀は詩文のなかにも現れており、『樂府詩集』の「瑯琊王歌」は以下のように詠われている。

新買五尺刀

新たに五尺の刀（かたな）を買つて

懸著中梁柱

中梁の柱に懸著す

一日三摩娑

一日に三たび摩娑（まさ）し

劇於十五女

十五の女（むすめ）よりも劇（はなは）だし

歌意は「五尺の刀を買い求め、真ん中の梁柱に吊り下げた。一日に幾度も手にとつては撫でさする。まことに十五の娘よりも可愛いほどだ」などのように解され、南北朝の歌謡であり、北朝の歌謡が東晋から南朝梁代までに南方に伝わったとされる。⁽⁶⁷⁾この歌から五尺の刀が当時の妙齡の女性にも増して魅力をもった武器であり、それを佩用することを渴望していたことが知られる。

以上、漢代から南北朝にかけて史料・文献に現れる三尺・五尺・七尺の刀剣の相対的な検討から、五尺刀が佩刀であり、威儀を正す際にも用いられ、また祥瑞となることもあり、当該期の男性にとつて所有が望まれるなどの同時代的な認識を示した。

四 五尺刀下賜の意義

漢代を中心とした刀剣の銘文には吉祥句が定型的に用いられており、刀が単に武器であるだけでなく佩用する者を寿ぐことを目的としていることを示してきたが、刀そのものにも祥瑞としての意味があるという記述がある。これを端的に示すのが『南齊書』祥瑞志の内容であり、五尺刀一十口によつて永明という年号の示す祥瑞として象徴的に記されている。

さらにそのような五尺刀の属性と関連して、南北朝期のもつとされる瑯琊王歌な詠われる五尺刀もたんなる物理的な長さを示すだけでなく、これを壁に懸けて眺めつつ、何度も撫でるといふ行為は刀という器物によつて、それを保持できる状況を寿いでいる状況を詠じたものであろう。

後漢・永寿二年銘金錯銘刀に記された長さの考定も勘案すると、五尺刀とは必ずしも完整な長さを規準とした物理的類型ではなく、南北朝の漢詩にみえる比喩的意味を含めて、おおまかな大刀の範疇を示すと理解することが適切であろう。すなわち、刀筆として官吏の持ち物として象徴される書刀をはじめとして、精緻な実寸によるといふよりは五尺・七尺などのいわば人文的かつ慣習的な類型化がなされていたと考えられるのである。

いっぽう、正史のうえで魏志倭人伝と『南齊書』にみえる五尺刀が、以上にみたように単に物理的な長さを示すだけでなく、そもそもそれ自体が吉祥を示す祥瑞であることを勘案する時、魏の皇帝が難升

米らを介して五尺刀に与えたのは、たんなる物質的な武器の下賜とは異なり、これを保持する者すなわち親魏倭王である卑弥呼に吉祥があることを寿いだものと推定される。

五尺刀が銅鏡・黄金とともに与えられていることに関しては、銅鏡の下賜は他に同時代の例がなく、邪馬台国に対する個別的対処とみられるが、刀と黄金の組み合わせは、すでにふれた前漢・後漢代の匈奴に対する場合と同じく蛮夷に対する下賜品として通底する中国王朝の姿勢があつたとみられる。下賜品としての刀剣の意味は後漢の章帝が病死した王に御剣を下賜したことにみられるように、哀悼の意を示すものとして賜与されているとみられる。いずれの場合も漢代においてすでに刀剣が下賜品として位置づけられていたことを示している。

五尺刀とともに卑弥呼に与えられた黄金は前漢代を中心として、皇帝が臣下等に対して行う賞賜の対象となり、下賜が盛んに行われた。漢代における黄金の下賜に関する統計的研究では前漢代の史料に現れた黄金の下賜の総計は九〇万斤すなわち現在の二七六三三五キログラム、後漢代では総計二一七四〇斤すなわち五五五六キログラムと算出されている。⁶⁸⁾

前漢・後漢代の黄金の下賜のうちで、もっとも大量の黄金を下賜された記事としては匈奴に対する軍功によって元朔五年（紀元前一二四）と六年（紀元前一二三）に衛青に対して、それぞれ二十余万斤と五十万金が与えられている。⁶⁹⁾ ただし、これらは国家的な非常時に対する賜金であって、単純に個人に対する事例としては扱えない。

呉楚七国の乱を首謀した呉王劉濞が諸王に送った書簡には、敵の大

將を斬り、または捕えた者には金五千斤を賜い、万戸を封ずるとし、以下、斬つたり、あるいは捕えた相手によって列將の場合は三千斤と五千戸を封じ、裨將の場合は二千斤と封二千戸を封じ、二千石の場合は千斤と封千戸を封ずる、とある。⁷⁰⁾ ここでは敵の將の地位によって行賞に差をつけており、その主な褒賞として金と禄をあげている。

史料にみえる個人に対する賜金の多量な例としては広陵歴王胥・周勃などが五千斤を賜っている。⁷¹⁾ そのほかにも黄金千斤・五百斤などの賜金がなされているが、二百斤・百斤を賜う場合が多い。⁷²⁾ この当時の一斤は一六両であり、現在の単位では約二五〇グラム前後とされるから、卑弥呼の下賜された金八両と比較すると漢代とくに前漢代の黄金の膨大な下賜が推し量られよう。また、すでにふれたように匈奴に対する下賜品に金と刀剣があることは、卑弥呼に対する金と五尺刀の下賜と類型化される事象である。

このように五尺刀を含む刀剣と黄金はともに漢代を中心として、皇帝からの下賜品であることが知られ、とくに黄金の賜与の機会と量は著しく減少したとされるが、三国時代においても、漢代以来の黄金の下賜が行われたのであり、その一つとして卑弥呼に対する黄金八両の下賜があると位置づけられる。⁷³⁾

以上の考察によって後漢代を中心として吉祥句が象嵌された刀剣が流行し、また史料では五尺刀そのものが祥瑞であることを明らかにするとともに魏によって卑弥呼に与えられた五尺刀は、漢代以来の刀剣や黄金の下賜の系譜上にあつたことを示した。

結語

本論を閉じるにあたって、行文にそいながら、内容を摘要することによって結語としたい。

まず、尺の単位で表現される刀の実物資料として、漢代を中心として類例がある金象眼の銘文のある鉄刀のなかで、近年になって知られた資料である永寿二年（一五六）金錯銘刀には「長三尺四寸把刀」の文章があり、実際に後漢代の長さの分かる類例となるとともに、五尺刀の長さが推定された。また、この刀銘をはじめ漢代の刀銘には吉祥句が記されることが多く、そのことによって佩用する者を寿ほぐという目的があったことを指摘した。

次に刀剣の下賜については史料・文献の事例からは臣に対する寵愛や死後の追悼の際に下賜され、匈奴に対する事例に示されるように蛮夷に対して与えられることがあることを示した。刀剣の長さである尺寸に関しては、永寿二年銘刀の例からも厳密な基準による数値的な分類というよりは、漢代から南北朝にかけての史料・文献・歌謡などには尺の単位で、当時の文化・教養に依拠したいわば人文的に類型的に表現された刀が現れており、そのうち、尺刀が官吏の用いる文房具的な利器であるのに対し、七尺刀が軍事的権威や個人の勇武を可視的に表徴するものである。これらに対し、五尺刀は佩刀としては一般的なものではあるが、南北朝期の歌謡にも、その所有が切望されることが歌われていることからわかる。また、南朝・梁では有銘の五尺刀そのものが祥瑞として記され、その発現が吉祥とされたことを論じた。

このように五尺刀を含む刀剣は、吉祥句を銘することによって佩用者を寿ほぎ、あるいは有銘の五尺刀そのものが祥瑞となるのであり、そのような意味合いから、下賜がなされた。

そして、このような属性を有する五尺刀が魏から邪馬台国の卑弥呼に下賜された史的背景としては、金が漢代の主たる下賜品であることを勘案する時、五尺刀とともに金八両が下賜されたことは、これらが漢代の下賜品の系譜にあることを示した。

結論として、魏の卑弥呼に対する下賜品みえる五尺刀は、単なる武器であるにとどまらず、漢代以来の制度に準ずる慣習や人文的習俗に立脚していることを論じ、このような史的背景の考察から、刀剣としての形式的な比定が主体であった従来の議論に対し、新たな方向を示した。

〔注〕

- （1）大庭脩「卑弥呼を親魏倭王とする制書」『古代中世における日中関係史の研究』（同朋舎出版、一九九六年）
- （2）周知のように、当時の楽浪・带方二郡の政治的状況から、景初二年は景初三年の誤記とする説があるが、制詔の内容の検討であるため、原表記のまま引用した。
- （3）藤田元春『上代日本交通史の研究』（刀江書院、一九四三年）一七〇～一七三頁
- （4）三品彰英『邪馬台国研究総覧』（創元社、一九七〇年）一三六～一四〇頁
- （5）石野博信『邪馬台国の考古学』（吉川弘文館、二〇〇一年）二一四～二一五頁
- （6）奥野正男『鉄の古代史1・弥生時代』（白水社、一九九一年）他

- (7) 佐伯有清『魏志倭人伝を読む―卑弥呼と倭国内乱―』下 (吉川弘文館、二〇〇〇年) 一〇〇～一〇二頁
- (8) 田率「対東漢永寿二年錯金鋼刀の初歩認識」(『中国国家博物館館刊』二〇一三年第二期) (中国語文献)
- (9) 『芸文類聚』第六〇巻・軍器部・刀
又把刀銘曰、奔奔名金、昆吾遺璞、裁為把刀、利垂切玉。
- (10) 田率「対東漢永寿二年錯金鋼刀の初歩認識」(前掲注(5))
陸錫興「論漢代的環首刀」(『南方文物』二〇一三年第四期) (中国語文献)
- (11) 陸錫興「論漢代的環首刀」(前掲注10)
- (12) 秦漢代を中心とした尺度に関しては紀年銘資料から導き出される前漢代の一尺は二三・〇から二三・二センチメートルであり、誤差を勘案すると二三・一センチメートルであることが検証されている。また、後漢代から三国時代の尺度についても、紀年銘資料から実数が割り出されているが、誤差含んでいるとする前提になっても、数値としては帰一せず、後漢代の一尺は二三から二四センチメートルの間であり、数値の分布から二三・五センチメートルとされている。三国時代の尺の実物からも二三・八から二四・二五センチメートルであるが、二三・八センチメートルの実例が多い。以上の実物尺と実尺との関係については下記参照。
- 吳承洛著・王雲五・傅緯平主編『中国度量衡史』(台湾商務印書館、一九六六年) (中国語文献)
- 藪田嘉一郎編訳注『中国古尺集説』(綜芸舎、一九六九年)
- 中国国家計量総局主編・山田慶児・浅原達郎訳『中国古代度量衡図集』(みすず書房、一九八五年)
- 丘光明編著『中国歴代度量衡考』(科学出版社、一九九二年) (中国語文献)
- 吳慧「魏晋南北朝隋唐の度量衡」(『中国社会経済史研究』一九九二年第三期) (中国語文献)
- 姜波「秦漢度量衡制度的考古学的研究」(『中国文物科学研究』二〇一

- 二年第四期) (中国語文献)
- これらの数値を参照するならば、倭人伝当時の五尺刀は短くとも一五センチメートルから、長い場合は一二〇センチメートル程度の長さだと推定されよう。
- (13) 劉志遠「成都天廻山崖墓清理記」(『考古学報』一九五八年第一期) (中国語文献)
- (14) 曾庸「漢代的金馬書刀」(『考古』一九五九年第七期) (中国語文献)
- (15) 『漢書』卷八九・循吏伝第五九・文翁
減省少府用度、買刀布蜀物、齎計吏以遺博士。
- (16) 『太平御覧』卷三四六・兵部七七・刀下
又金馬書刀銘曰巧冶煉剛、金馬托形。黃文錯鏤、兼勒工名。
- (17) 羅振玉『貞松堂集古遺文』十五・金馬書刀(『石刻史料新編』第四集、二〇〇六年)
- (18) 徐州博物館「徐州発現東漢建初二年五十煉鋼刀」(『文物』一九七九年第七期) (中国語文献)
- (19) 劉心健・陳自経「山東蒼山発現東漢永初紀年鉄刀」(『文物』一九七四年第一二期) (中国語文献)
- (20) 銘文については近年の再調査で釈字・釈読がなされている。
東京国立博物館、九州国立博物館編『重要文化財東大寺山古墳出土金象嵌銘花形飾環頭大刀』(同成社、二〇〇八年)
- 東大寺山古墳研究会、天理大学、天理大学附属天理参考館編『東大寺山古墳の研究』(真陽社、二〇一〇年)
- (21) 梅原未治「日本出土の漢中平の紀年太刀―大和樺本東大寺山古墳新出土品―」(『大和文化研究』七、一九六二年) 近年、この鉄刀が中国製であることに對して、形態が内反りであり、「上底星宿下辟不祥」という吉祥句が三世紀中葉以降に常用され、「百練」の「練」の字の使用の盛行時期などの点から疑義を呈する見方が示された。孫機「百煉鋼劍与相關問題」『仰觀集―古文物の欣賞与鑑別―』文物出版社、二〇一二年(初出は一九九〇年、中国語文献)
- その後の銘文等の再調査や觀察によつて、文字の象嵌に間隔がある

点など中国の同時代の象嵌資料と技法的にちがうことから、中国製とされており、本論でもこれに依拠している。東野治之「金象嵌銘花形飾環頭大刀の銘文」東京国立博物館・九州国立博物館編『重要文化財東大寺山古墳出土金象嵌銘花形飾環頭大刀』（前掲注（9））

- (22) 富岡謙蔵『古鏡の研究』（臨川書店、一九七四年）〔初版は一九二〇年〕

- (23) 『淮南子』天文訓
日冬至則水從之、日夏至則火從之、故五月火正而水漏、十一月水正而陰勝。

- (24) 『春秋左氏伝』昭公一七年

其與不然乎、火出、於夏為三月於商為四月、於周為五月、夏數得天、若火作、其四國當之、

- (25) 龐朴「五月丙午」与「正月丁亥」（『文物』一九七九年第六期）〔中国語文獻〕

- (26) 『抱朴子』内篇・登涉

又金簡記云、以五月丙午日月中、搗五石、下其銅。五石者雄黃、丹砂、雌黃、礬石、曾青也。皆粉之、以金華池浴之、内六一神爐中鼓下之、以桂木燒為之、銅成以剛炭煉之、令童男童女進火、取牡銅以為雄劍、取牝銅以為雌劍、各長五寸五分、取土之數、以厭水精也。帶之以水行、則蛟龍巨魚水神不敢近人也。

- (27) 『後漢書』郎顗襄楷列伝第二〇下・郎顗

宜以五月丙午、遣太尉服干戚、建井旗、書玉板之策、引白氣之異、於西郊責躬求愆、謝咎皇天、消滅妖氣。蓋以火勝金、輒禍為福也。

- (28) 西田守夫「神獸鏡の図像」（『MUSEUM』二〇七、一九六八年）

- (29) 王士倫編著・王牧修訂『浙江出土銅鏡』（文物出版社、二〇〇六年）〔中国語文獻〕五二頁

- (30) 龐朴「五月丙午」与「正月丁亥」（前掲注（25））

- (31) 『芸文類聚』卷六〇・軍器部・刀

東觀漢記曰馬嚴為陳留太守、建初中、嚴病、遣功曹史李襲、奉章詣闕、上召見襲、問疾病形狀、以黃金十斤、葛縛佩刀書刀革帶付襲、賜嚴。

- (32) 『漢書』卷七・紀第七・昭帝

（元鳳）五年春正月、広陵王來朝、益国万一千戸、賜錢二千万、黄金二百斤、劍二、安車一、乘馬二駟。

- (33) 『後漢書』朱馮虞鄭周列伝第三・馮魴 弟石

能取悅當世、為安帝所寵。帝嘗幸其府、留飲十許日、賜駁犀具劍、佩刀、紫艾綬、玉珎各一、拜子世為黃門侍郎、世弟二人皆郎中。

- (34) 『後漢書』光武十王列伝第三二・東平憲王蒼 子任城孝王尚

忠立（十）一年薨、子孝王敞嗣。元和三年、行東巡守、幸東平宮、帝追感念蒼、謂其諸子曰思其人、至其郷、其処在、其人亡。因泣下沾襟、遂幸蒼陵、為陳虎賁、鸞輅、龍旂、以章顯之、祠以太牢、親拜祠坐、哭泣盡哀、賜御劍于陵前。

- (35) 『漢書』卷九四下・匈奴伝第六四下

单于正月朝天子于甘泉宮、漢寵以殊禮、位在諸侯王上、贊謁称臣而不名。賜以冠帶衣裳、黄金璽綬、玉具劍、佩刀、弓一張、矢四発、戸木戟十、安車一乘、鞍勒一具、馬十五匹、黄金二十斤、錢二十万、衣被七十七襲、錦繡綺縠雜帛八千匹、絮六千斤。

- (36) 『後漢書』南匈奴列伝第七九

秋、南单于遣子入侍、奉奏詣闕。詔賜单于冠帶、衣裳、黄金璽、縹綬、安車羽蓋、華藻駕駟、宝劍、弓箭、黑節三、駙馬二、黄金、錦繡、繒布万匹、絮万斤、樂器鼓車、棨戟甲兵、飲食什器。

- (37) 『後漢書』南匈奴列伝第七九

又賜猷馬左骨都侯、右谷蠡王雜繒各四百匹、斬馬劍各一。

- (38) 『後漢書』南匈奴列伝第七九

呼蘭若尸逐就单于兜樓儲先在京師、漢安二年立之。天子臨軒、大鴻臚持節拜授璽綬、引上殿。賜青蓋駕駟、鼓車、安車、駙馬騎、玉具刀劍、什物、給綵布二千匹。賜单于闕氏以下金錦錯雜具、駟車馬二乘。

- (39) 『唐六典』卷一六・衛尉寺宗正寺

刀之制有四、一曰儀刀、二曰鄣刀、三曰橫刀、四曰陌刀。：（中略）今儀刀蓋古班劍之類、晋宋已來謂之禦刀、後魏曰長刀、皆施龍鳳環至隋、謂之儀刀、裝以金銀、羽儀所執。鄣刀蓋用鄣身以禦敵。橫刀、

佩刀也。兵士所佩、名亦起於隋。陌刀、長刀也。

- (40) 『漢書』卷七七・蓋諸葛劉鄭孫母將何伝第四七・蓋寬饒

〔前略〕…上不曉、遂下寬饒吏。寬饒引佩刀自剄北闕下、衆莫不憐之。

- (41) 『漢書』卷五四・李広蘇建伝第二四・蘇建 子武

武謂惠等、屈節辱命、雖生、何面目以伝漢。引佩刀自刺。

- (42) 『後漢書』董卓列伝第六二

越騎校尉汝南伍孚忿卓凶毒、志手刃之、乃朝服懷佩刀以見卓。

- (43) 『三国志』魏書卷一四・程郭董劉蔣劉伝・劉曄

曄因自引取佩刀斫殺宝、斬其首以令其軍云…〔後略〕

- (44) 『後漢書』志第三〇・輿服下

漢承秦制、用而弗改、故加之以双印佩刀之飾。至孝明皇帝、乃為大佩、

衝牙双瑤瑁、皆以白玉。

- (45) 『漢書』卷六六・公孫劉田王楊蔡陳鄭伝第三六・楊敞 子惲

惲怒、持大刀曰蒙富平侯力、得族罪。母泄惲語、令太僕聞之乱余事。

- (46) 『玉台新詠』第九卷・古絶句四首

藁砧今何在、山上複有山。何當大刀頭、破鏡飛上天、日暮秋雲陰、江

水清且深。

- (47) 内田泉之助『玉台新詠』新釈漢文大系第六一卷〔明治書院、一九七五

年〕六三三～六三四頁

- (48) 『漢書』卷五四・李広蘇建伝第二四・李広 孫陵

陵居谷中、虜在山上、四面射、矢如雨下。漢軍南行、未至鞬汗山、一

日五十万矢皆尽、即棄車去。士尚三千余人、徒斬車輻而持之、軍更持

尺刀、抵山入陜谷。

- (49) 『魏書』卷三八・列伝第二六・王慧龍

玄伯偽為反問来、求屏人有所論。慧龍疑之、使人探其懷、有尺刀。玄

伯叩頭請死。

- (50) 『後漢書』馮岑賈列伝第七・馮異

〔建武二年春〕時赤眉、延岑暴乱三輔、郡縣大姓各擁兵衆、大司徒鄧

禹不能定、乃遣異代禹討之。車駕送至河南、賜以乘輿七尺具劍。

- (51) この具劍については李賢の注に「具謂以宝玉裝飾之」とあり、また

『東漢觀記』紀二・穆宗孝和皇帝・章和四年春正月条に「賜玉具劍」とみえることなどから、宝玉飾りの劍と解されている。以上は方向東『後漢書』拾零〔『文教資料』一九九七年第五期〔中国語文献〕による。

- (52) 『晋書』卷一〇三・載記第三・劉曜

安與壯士十余騎於陝中格戰、安左手奮七尺大刀、右手執丈八蛇矛、近

交則刀矛俱發、輒害五六…〔後略〕

- (53) 『晋書』卷一〇三・載記第三・劉曜

隨上歌之曰隨上壯士有陳安、驅鞬雖小腹中寬、愛養將士同心肝。馬羣

聽父馬鉄瑕鞍、七尺大刀奮如端、丈八蛇矛左右盤…〔後略〕

- (54) なお、漢代の度量衡に関しては、下記文献を参照。

吳承洛著・王雲五・傅緯平主編『中国度量衡史』〔台湾商務印書館、一九六六年〕

藪田嘉一郎編訳注『中国古尺集説』〔綜芸舎、一九六九年〕

中国国家計量総局主編…山田慶児・浅原達郎訳『中国古代度量衡図

集』〔みすず書房、一九八五年〕

丘光明編著『中国歴代度量衡考』〔科学出版社、一九九二年〕〔中国語

文献〕

姜波『秦漢度量衡制度的考古学的研究』〔『中国文物科学研究』二〇一

二年第四期〕〔中国語文献〕

- (55) 『三国志』魏書一八関二李臧文呂許典二龐閭伝・典韋

韋好持大双戟與長刀等、軍中為之語曰帳下壯士有典君、提一双戟八十

斤。

- (56) 閭显欣・張洪安「関羽使用的兵器考証」〔『漢陽職業技術学院学报』二

四一三、二〇一一年〕〔中国語文献〕

- (57) 『史記』卷八・高祖本紀第八／一二年

高祖擊布時、為流矢所中、行道病。病甚、吕后迎良医、医入見、高祖

問医、医曰病可治。於是高祖嫚罵之曰吾以布衣提三尺劍取天下、此非

天命乎。命乃在天、雖扁鵲何益。遂不使治病、賜金五十斤罷之。

『史記』列伝・卷一〇八・韓長孺列伝第四八

：（前略）然而高帝曰提三尺劍取天下者朕也。

- (58) 王子今「斬蛇劍」象征与劉邦建国史的個性」、『史学集刊』二〇〇八年第六期）（中国語文献）

- (59) 『古今注』卷上・輿服第一

漢世伝高祖斬白蛇劍、長七尺。漢高祖為泗水亭長、送徒驪山、所提劍理応三尺耳。後富貴、則得七尺宝劍、捨旧劍而服之。後漢之世、唯聞高祖以所佩之劍斬白蛇、而高祖常佩此劍、便謂此劍即斬蛇之劍也

- (60) 王子今「斬蛇劍」象征与劉邦建国史的個性」（前掲注(58)）

陳曄「劉邦斬蛇」与「斬蛇劍」的文化史考察」（『福建師範大学学報（哲学社会科学版）二〇一二年第三期』（中国語文献）

- (61) 成慶について晋灼の注は秦の始皇帝を暗殺しようとした荆軻であると、李賢の注では淮南子にみえる古代の勇士を指すとする。

- (62) 『漢書』卷五三・景十三王伝第二三・広川恵王越

師受易、論語、孝経皆通、好文辞方技博弄倡優。其殿門有成慶画、短衣大袴長劍、去好之、作七尺五寸劍、被服皆效焉。

- (63) 長廣敏雄『漢代画像の研究』（中央公論美術出版、一九六五年）一三九頁

- (64) 楊孝軍「徐州新征集的漢画像石研究」（『東南文化』二〇〇九年第四期）（中国語文献）

- (65) 『南齊書』卷一八・志第一〇・祥瑞／銅鍾等

（永明）十年、蘭陵民齊伯生於六合山獲金璽一鈕、文曰年予主。世祖治益城、得五尺刀一十口、永明年曆之数。

- (66) 平秀道「南齊書祥瑞志について」（『龍谷大学論集』四〇〇・四〇一、一九七三年）

- (67) 松枝茂夫編『中国名詩選（中）』（岩波書店、一九八四年）二四〇～二五一八九～一九〇頁

- (68) 彭信威『中国貨幣史・修訂版』（上海人民出版社、一九六五年）一四一～一五〇頁

- (69) 『漢書』卷二四下・食貨志第四下・貨

此後四年、衛青比歳十余万衆擊胡、斬捕首虜之士受賜黄金二十余万斤、

而漢軍士馬死者十余万、兵甲輶漕之費不與焉。

『漢書』卷二四下・食貨志第四下・貨
其明年、大將軍、票騎大出擊胡、賞賜五十万金、軍馬死者十余万匹、輶漕軍甲之費不與焉。

- (70) 『漢書』卷三五・荆燕吳伝第五・吳王濞

凡皆為此、願諸王勉之。能斬捕大將者、賜金五千斤、封万户、列將三千斤、封五千戸、裨將、二千斤、封二千戸二千石、千斤、封千戸、皆為列侯。

- (71) 『漢書』卷四〇・張陳王周伝第一〇・周勃

文帝即位、以勃為右丞相、賜金五千斤、邑万户。

『漢書』卷六三・武五子伝第三三・広陵厲王胥

後延寿坐謀反誅、辞連及胥。有詔勿治、賜胥黄金前後五千斤、它器物甚衆。

- (72) 上記の漢代の賜金については記事の一覧表が下記論考に掲載されており、基本的にはこれにより、本論で引用した関係論文によって補綴した。

馬非百「秦漢經濟史資料（四）——貨幣制度」（『食貨』三一、一九三五年）（中国語文献）

- (73) 前掲注(12)文献参照

- (74) これについては本論で示した事例も含めて、別に論じた。

門田誠一「卑弥呼に下賜された金八両の意味…漢魏代の黄金使用との相關的検討」（『歴史学部論集』（佛教大学）六、二〇一六年）

（もんだ せいいち 歴史文化学科）

二〇一七年十月九日受理